慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 勤倹貯蓄説の流行；文部大臣の文学者招待；法憲発布廿年；外務大臣の対米意見 |
| Sub Title | |
| Author | 竹, 葉 |
| Publisher | 三田学会 |
| Publication year | 1909 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.2 (1909. 3) ,p.241(107)- 248(134) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 時評 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090301-0107 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビスマルクとカヴール





時評

## ○勤儉貯蓄說の流行

竹葉

大臣、學者、坊主、耶蘇、皆口々に勤儉を唱へ貯蓄を說く。睡時蒼蠅の去りやらぬ心地して、うるさきことの限りなり。德川時代の政治上の改革には必ず儉約の勵行を伴ひたりき、同時代の學者が政治經濟に關する學說の大半は勤儉論なりき。僧徒は北條氏の古より簡易素朴の生活を敎へて怠らざりき。借問す、明治聖代の大臣學者坊主耶蘇勤儉說の外に工夫なきか。

文明の根原は欲望の增加なり。人は二個の欲求に依つて支配さる。安易の欲求及び卓越の欲求是なり。冬暖かに、夏涼しく、出づるに車あり、入るに家あり、三度の食に飢ゆることなく、病んで懇切なる看護を受け、常住不斷文明社會の提供する甘き歡樂を分ち享けんと願ふもの卽ち安易の欲求なり。然れども人は單に此安易の境涯を以て滿足し得るものに非ず。人は必ず其儕輩を越えて之が享受せざる特殊の快樂を贏ち得んとするの欲求に依つて指導せられざるなし。卽ち彼のマロック氏が、總ての生產的勞働は常に社會上の不對當に對する欲求に依つて刺激せらるゝものなりと謂へるは此感情より意志に移るの過程を指すものにして、吾人の所謂卓越の欲求是なり。

纖毛蟲はアミーバよりも多くの欲望を有す。鯛は海月よりも多くの欲望を有す、大人は小供よりも多くの慾望を有す、而して文明人は野蠻人よりも多くの慾望を有す。ダイオゼニスの古より欲望の增加を罪惡視する哲人多しと雖も、欲望の增加は人間社會の發達にして、前者を制限せんとするものは卽ち後者を沮害するものなり。古吾人人類の初めて生れ出でたる世界は正に是一個の樂園なりしなり。地上にはセーゴー、パルム、麵麭の樹、フランテン樹さては椰子、波斯棗の類鬱乎として繁茂し、男女共

に此樂園に最少の勞力を以て生活することを許されたりき。彼等は皆自然の兒にして、等しく皆瞬間の裡に活きつゝあり、將來に慮ひ及ばず、過去を想ひ浮べず、神が無償的に濫給する漿果乾果に食を得て、其本能の滿足せられたる時、彼等は樹下、洞中又は叢林の蔭を安養淨土と見て、軈て夢は微妙香潔の極樂世界に馳せ、其脹大したる胃腑中には未だ消化し盡さゞる木の實、草の根が生のまゝなる蝸牛、蛆、蟋蟀、蟻と共に充滿せるなりき。彼等の欲望は固より單純なり。哲人は此境涯を望んで理想界となす可きも、此等の理想界は彼等の間に神の禁制を破つて樂園中央の智惠の實を食はんとの新欲望發生と共に永へに失はれたり。「土は汝の爲めに荊棘と薊を生」じたる詛はれたる地に人は自が額の汗に由つて辛うじて其安易の欲求を滿しつゝ尙ほ卓越の希望に光明を得て其前途を開拓して怠らざりき。アベルを殺したるカインは實に卓越の慾火に眼昏みたる者なりしなり。

人は模倣の動物なり、一人、一組會、一時代に生じたる欲望は直ちに他の人、他の社會、他の時代に傳播す。欲望は斯くて其廣さを增すなり。

人は習慣の動物なり。一度生じ一度滿足せられたる欲望は軈て深く心裡に根を固めて終には非常なる苦痛を敢て爲すにあらざれば之を除去すること能はざるに至るなり。新欲望は何時とはなしに習慣の力を借りて第二の天性と化し去るなり。欲望は斯くて其深さを增すなり。

新欲望が其廣さを增し其深さを加ふる毎に社會の一隅には之に對する儉約論者の非難の聲を聞く。然も這個非難の聲に頓着なくして社會に普及したる欲望は多くの文明を生むの母となれり。ランプが產みたる日本の文明は多大なるものあり。然れども其使用一般に普ねからんとするや佐田介石なる僧侶はランプ亡國論を絶叫して止まざりき。蝙蝠傘の輸入せらるゝや金原明善氏は頻りに蝙蝠傘亡國論を主張したりき。殊に面白きは香川修德の肉食論を難じたる太田錦城の所言なり。曰く「我邦は四面大海故、魚類極めて多し、故に人獸肉を食ふことを好まず。四足を食へば穢れ也とて國家の令にもあり。世人も斯く覺えて忌み嫌ふ。是も佛法仁柔の餘功なるべし。然るに香川修德と云へるもの、邦人は獸肉を食はざる故に虛弱なりなどゝ云ひおどせし故、近年は山國の人而已ならず、海邊の魚肉多き處まで皆々好んで食ふことにはなりたり。今は江戸などにも、冬月に獸店夥し。夫が故に惡瘡を發し、中風に類する病を發する者少なからず。（中略）。扨て此邦の人飢饉亂世と雖も人を食はざるは獸肉を忌むの大功なり。今より此の如く獸肉を喜び食せば、遂には人を食ふにも至るべし。殘忍の心も習より長ずれば、蟲を殺して止まざれば魚に至り、魚を殺して止まざれば獸に至り、鳥を殺して止まざれば人に至る。目出度き風俗の邦なりしを大に香川の爲に破られたり。仁人君子は殘暴の源を塞がずんばあらざるなり」。

蓋し新欲望は皆奢侈の形に於て現るゝの常なり。未だ何人も之を感じたることなきは卽ち其第一の理由にして、之が生產には經驗の缺如たるよりして巨額の生產費を要するは第二の理由なり。然も漸時奢侈品は必要品となるものにして、幾多の奢侈品をして必要品たらしめたるものが今日の文明進步の跡なり。日本人は毫も亡國の憂なくして洋燈洋傘を使用し得る程に發達し來りしなり。

欲望は生產を誘起し、生產は消費を誘起し、消費は欲望を滿足せしめて、玆に經濟的過程は終結を告ぐるなり。消費なき所に生產なし。國民をして可成的多大の欲望に滿足を得せしめ得るもの卽ち最富强なる國家なり。然れども欲望に自ら品種あり。國民の福祉を增進せしめ或は其高尙なる智的仰望に答へんとする欲望あれば、徒らに劣情の滿足に止りて、反つて其將來を過らしむるが如き欲望あるなり。這個の全欲望悉く之を一樣に見て悉く完全に滿足を與へしむるに努む可きや。爲政家、敎育家、宗敎家の注意を要するは此所なり。

彼等の當に努む可きは、奢侈の禁壓にあらずして、寧ろ倫理學上のグード（善）と經濟學上のグー

ヅ(貨物)と一致する點に於て益々人をして奢侈に趣かしむるに在り。不幸にして現今經濟學上貨物として取扱はるゝものの内には數多の不善なるものを包含す、云ふまでもなく酒、煙草、阿片の類皆是なり。然れども世は次第に澆季に趣き叔世末運に傾くにあらずして、黄金世界を將來に求めて時代は歩一歩之に近きつゝあるを信ずるものは、等しく倫理學上のグードと一致せざる經濟上のグーヅが次第に其數を減じつゝあるの事實を信ずるならん。

吾人の理想とする所は即ち奢侈の社會化なり。換言すれば私的奢侈を變じて公的奢侈たらしめんとするに在り。奢侈を行はんとするものは須く其社會的義務の觀念を伴ふ可きなり。斯くて總ての經費は悉く皆滿足の餘剰即ち社會の富の創造に歸す可きなり。

知るや知らずや吾國の勤儉論者は唯だ徒らに聲を大にして奢侈に流るゝの弊を説き貯蓄の效を述ぶ。而して無智不靈なる一般國民は普に位階學位ある人の説とし云へば何等の批判研究を試みずして之を實施せんとし、以て微妙なる經濟組織に如何なる變動を生ず可きやを察知せざるなり。小學兒童をして二錢の郵券を購うて郵便貯金をなさしむることを敎ゆる敎育家先生あれども、此金二錢をして運用下手なる政府の手に委せしむるよりも更に有利なる消費の道あることを説くものなし。

往昔德川氏の執政者幷に學者輩が社會の奢侈に流るゝを惧れ勤儉の趣旨を皷吹せんと努めたるは抑も深き理由ある所にして、當時學問技術の進歩幼稚にして生産業の發達從つて遲鈍に、一の見る可き工業なく資本は單に土地に投ぜらるゝのみにして、殊に其販路の如きも交通機關の不備と封建鎖國の制度とに由つて一藩一國の裡に限らるゝものの多く、國民過大の奢侈は頗る國家産業の根源を破壞し去るの虞ありしに加へて、自由競爭の闕缺より來る國民の因循なる、新なる欲望は益々新なる生産を刺激して國内の産業をして愈よ活潑々地なる發達をなさしむることなかりしなり。然るに維新後の日本は其社會的狀態に大なる變化を來したり。商業資本の投入は著しく國富の增大に資し更に最近に至りて工業資本の投入と共に國内富源の利用は殆ど餘す所なく行はれ、商業發達の地盤は彌よ廣大となり行きつゝあるなり。殊に科學の研究に國境なく泰西の新發明新工夫は直ちに吾國に輸入せられて何等の障礙なく之を應用し得るの地位に在り。往昔の人民は農商業の發達にして一定限に到達せんか、彼等は唯だ空しく既存の貨物を分配し之を消費するの外あらざりしなり。然るに現在及び將來に於ては既存の貨物の分配の外に吾人は新貨物を創造す可き所有ゆる機會を有するなり。此有望なる前途を有する秋に當つて、極端なる勤儉貯蓄を唱導するは論者の豫期せる生産資本を增大するの目的を達すること少きに加へて、反つて産業界の不振を招くの因となるなからんや。時代變じて、迂儒庸臣の頭腦獨り變ぜず、舊套の勤儉説を固持して改めず。憐む可く慨す可きの至りなり。



## ○文部大臣の文學者招待

抑も文部なるものは一省を特置するの要なきに強て之を設けたるものにして、其大臣たるもの代々無爲無能に終る可きや素より當然のことたるなり。然も何人と雖も伴食の名を冠せられて自ら快しとするものあらざれば、彼等は必ず何事をか計畫して此汚名を免れんとするなり。敎科書の國定の如き假名遣の改正の如き皆彼等が閣中の多忙なる事業なりしなり。現文部大臣小松原氏も亦無聊に苦める一人にして、之れを醫するの一法として案出したるものは即ち文學者招待なり。蓋し歷代の文部大臣の閣事業中に在りて最も無害なるものに屬するなり。蚊士俗吏一堂に酒を酌んで、前者が自然の愛を謳へば、後者は反自然の戀の功德を述ぶるに至つては更に面白し。奮ひ進むものは躓くことありと知れ。汝は靜に汝の内閣の倒るゝまで汝の椅子に凭れて坐眠すれば足る。彼の學生の風紀に關する訓令の如きに至つては少しく出過ぎ

たる措置たるの非難を免れざる可し。

## ○法憲發布二十年

生盲人他に問ふて曰く、乳色は何にか似たる、他答へて曰く、色白くして貝の如し、盲人復た問ふ、乳色は卽ち貝の聲の如くなるや、答へて曰く否、復た問ふ貝の色何にか似たる、答へて曰く、稻米粉の如し、盲人復た問ふ、乳色は柔輭なること稻米粉の如くなるか、稻米は復た何の似たる所ぞ、答へて曰く、雪の如し、盲人復た問ふ、稻米粉は冷かなること雪の如くなるか、雪復た何にか似たる、答へて曰く、白鶴の如し、生盲人終に眞の乳色を意識する能はずして去る。法は歷史の產物にして長く行はれたる自然の慣習制度に一定の成形を一國主權者が與へたる所のものなり。然るに日本の憲法は全く歷史なくして生じたるものにして其狀宛も一夜忽然として噴出したる富岳の如し。明治維新の後、澎湃として吾國の岸を打ちたる泰西文明の濤聲に驚き醒めたる國民の先覺が、一部熱狂の士の刺激に逢うて蒼皇輸入し來りしものにして、彼の一千七百九十一年及び一千八百三十年の佛國憲法を基礎として制定したる一千八百三十一年の白耳義憲法は再轉して一千八百五十年の普魯西憲法となり、三轉して吾が二十二年の憲法となりしものなり。卽ち毫も國民全般の自覺に基く所あらざりしなり。明治二十二年に於ける江戸ッ子は神田の祭禮と憲法發布式との間に何等の差別を見出すこと能はざりき。彼等は藝妓をして手古舞をなさしめ、山車を引き、馬鹿囃子を演じて之を祝したりしなり。彼等は蓋し憲法に對する生盲人なり。過去二十ヶ年は正に此生盲人に憲法の色を意識せしめんとして苦心せるの時代に屬するなり。

一般國民をして憲法の何者なるやを認識せしめ、自ら其所有者たり、擁護者たるの自信を固からしめ、以てこれが運用の法を感得し、立憲政治の美果を結ばしむるは尙ほ遠き〳〵將來の事たるなり。記せよ、憲法發布以來滿二十年目の議會は、尙ほ未だ囂々として大臣の言責に關する議論を戰はしつゝあるものなるを。



## ○外務大臣の對米意見

小村外務大臣は二月二日衆議院に於て同七日貴族院に於て四十餘分に涉りて政府の對外方針を說明せり。中に就きて最も世人が興味を以て耳を傾けたるものは對米問題なり。帝國は東海の君子國なり。帝國の外交は勢君子的ならざる可らず。外相の所言は遺憾なく此特長を發揮したり。日米兩國の親交は歷史的の性質を有すと云ひ、近頃加州立法部の問題となり居れる排日的議案の如きに至つては、事同國の一部分に於ける事項に屬し、同國多數人士の贊同する所にあらざるを以て、帝國政府は同國政府の誠意と同國國民の明識とに依賴し何等重大なる國際問題を惹起するに至らざるべきを期待すと說き、更に移民政策に入りて、帝國の地位一變し其經營を行ふ可き地域の擴大を見るに至りたるを以て、漫りに我民族を隔在せる他國の領域內に散布するを避け、成る可く之を一方面に集中し其結合一致の力に依つて經營を行ふことを必要とするに至りたる事實を述べ、加奈多及合衆國への移民に關しては旣定の方針を踏襲し誠實に渡航の制限を實行しつゝありと謂ひて暗に米國移民の政策上不利なることを示せり。日本國民は大なる不平不滿を以て之を聽けるものならんと思惟す。

吾が外交當路者の眼中には公明正大なるルーズベルト氏在るのみにして無智暴虐なる加州民と頑迷偏執なる州會との存在を知らざるなり。而して米國中央政府の權限は果して克く那邊に及ぶことを得るや、地方州會の立法權は如何なる效力を有するやを知らざるものゝ如し。米國民悉く皆ルーズベルト氏の心胸を有するものならんか、帝國の外交は大なる成功を遂げ得べし、然も多數暴慢なる人民は帝國外交の君子的なるに乘じて彌よ排日の火の手を上げ更に商業上に於ても不平等なる制限を加へんとするに至れり。外相は固より這般の

事實を知悉せざるにあらず、否、充分に之を知りながら尚ほ平然として米國政府の誠意と同國民の明識に依頼する所、益々其君子的の特長を示すなり。夫子の道至大なり。世は果して之を容るゝことを得や如何、外相をして我が道非なるかの歎聲を發せしむるの日なきや否や。



# 新著批評

星野勉三

## 大隅重信閲 武富時敏著 豫算詳解

我國語に於て豫算に關する著書は決して多しとせず其見るに足る可きものは先きには、ヘッケル氏の豫算論を日本銀行員吉井一三氏の譯するあり又法學士工藤重義氏の豫算決算に關する著述ありたる位なりしが昨年十二月帝國議會の開會に際して財政通の聞ある武富時敏氏は豫算詳解なる一書を公にせり此好著は大隈伯の閲する所なりと云ふ余輩は既に前號の新刊書批評欄に於て大隈伯序文の採るに足らざる所以を述べしが今又武富氏の著に冠するに大隈伯閲の名を以てするが如きは却て此好著をして或は駄法螺を羅列せるに過ぎざる可しとの疑を起こさしむることなき哉頗る懸念に堪へざるなり。



此書は編を分つこと四にして

第一編　豫算の要義
第二編　歳入歳出の研究
第三編　特殊事項の研究
第四編　豫算決算の對照

となし第一編に於ては我豫算に關する重要問題に付て簡單なる説明を下し併せて豫算と憲法及び會計法との關係を説き第二編に於ては歳入歳出の重要なる項目に付て詳細なる説明を試み又第三編に於ては豫算に關する重要なる時事問題に付て委細の解説を加へ第四編に於ては廿四年度より卅九年度に至る迄の豫算と決算とを數字的に對照せり本書は右の内容に對して豫算詳解の名を付するものにして我國の豫算を詳細に解説するを目的とし敢て學術的の議論を試むるに非ず然れども能く事實を網羅し改行發行の財政に關する報告書の如きは盡く之を分類編入せり故に單に豫算詳解と云ふよりは却て日本豫算詳解と命名する方適當ならん。